



5年ぶりに再開できた ボランティア派遣事業

理事長 藤井 忠子



教材を手作りするボランティアと表彰状

1999年から2020年まで主に南山大生を募って毎年学校建設や給食支援などの現地ボランティア活動を継続してきましたが、コロナ禍で中断！南山大学で募集に尽力してくれていた「RASA学生活動」グループのメンバーがその間に全員卒業して、学生による自主募集が不可能な状況になっていました。RASA-Japan(以下「RASA」という)の活動は、南山大学の理念「人間の尊厳」に沿っており、5年ぶりの実施に向け同大学のドミンゴス教授の力強い協力も得られ再開が実現しました。9月から11月の間、RASAのボランティア活動体験者からも、再開を願う声が届き、自発的に具体的な協力を得られました。募集開始から締切迄の約3か月間で応募者が目標の15人に達したのです。

RASAが2011年当校への校舎贈呈後、校内で設備を整えて場所を設け、栄養失調児100人に給食を開始し、以後支援を継続していましたが、コロナ禍で学校閉鎖によって、やむなく中止。1年半後学校長の強い要望に応じて食品配付を開始。これは貧困で、空腹で通学できず、また欠席しがちになり学習の継続が困難と危惧される学童140人への年間通しての支援として実施していますが、今回ボランティアは、その準備と配付も行いました。



盛大なボランティア歓迎式



行楽やホームステイについて

バタンガスへの1日行楽はホストファミリーからも2名ずつが参加し終日一緒に過ごす計画で、ボランティアがホストと楽しい時間を過ごしてほしいというRASAの願いで行いました。

ホームステイによって、ホストファミリーと共に家族の一員として過ごす中で、「異文化に触れ、日本と違う価値観や日々の生活での人と人の繋がりや深さ、日本ではなかなか見られない良さを気づきました。これからの自分の将来や生き方に取り入れたい。」と学生の多くが、アンケートに書いていました。



全校生徒と父兄も歓迎式に参加

現地の挨拶言葉に、日本語の意味で「ご飯食べた？」がありますが、一未だなら家においでーということだそうで「食べることは生きること！」フィリピンでは人間の生きる原点を挨拶にしているのだと気付きました。「明日より今日1日を楽しみ大切に！」の生き方です！食を通じて、常に人々の交流が濃い訳ですが、「人はまさに人と人にある。」これこそ彼らが大切にしているその生き方を現代の日本も改めて学び直したいものです。

ボランティア活動

2月20日から13日間を1人1家庭ホームステイ、平日は学校で多くの授業内容をこなすため、限られた時間内で、手作り教材を各班毎に工夫して授業に臨み有意義な活動を行うことができ、RASAに対して学校から表彰状をいただきました。



正会員スタッフ
貴船 貢

昨年の11月にRASAの活動主旨に共感して会員登録をし、今回スタッフとしてStudy Tourに参加しました。学生メンバーが揃ってからフィリピン渡航までの準備期間は正月を挟んで約2か月という条件の中、参加者もスタッフも不安を抱えての出発となりました。その内容を報告し、新入り会員としての感想を述べます。

小学校での教育体験

13日間の活動のメインは、各自がホームステイをしながらラグナ州カブヤオ市のサウスビル1小学校に通い6年生の子供たち20クラス約800人を対象に授業を行うことです。到着日の翌朝から先ずはウェルカムパーティで訪問者全員が歓迎を受けすぐに授業を開始しました。6日間で15時限(1時限は45分)の授業を15名の学生が4チームに分かれて延べ60時限を行うという計画です。科目は日本語、栄養、衛生の3つでそれぞれに5時限を当てました。最初の日本語のクラスでは子供たちのキャーキャーという声で歓迎を受け、まるでアイドルの登場を待つファンさながらの興奮状態で全員がビックリ。2名のコーディネータの助けもあって何とか授業ができる状態になりました。その後授業の回を重ねるごとに学生たちの教え方が上達していきましたが、これは皆がチーム毎に協力して教材の準備をしたり、英語での教え方を真剣に話し合ったりと、寸暇を惜しんで次の授業に備えたことによるものです。授業の終盤では各人が自信をもって子供たちと接している姿を目にすることができました。



授業の様子

貧困家庭への食品配付など

小学校の校庭に学校が選定した家庭の親と子供140組が集まり、学生たちが中心となって受付、食品準備、手渡しを分担し、米、卵、缶詰などを配付しました。それに先立ち食品を配付する家庭を数人ずつに分かれて訪問をしたり、それを調達する市場を見学したこともフィリピンの実情を知るうえで参考になりました。そのあと隣のカランバ市にあるホセ・リサール記念館を訪問し、フィリピンの人々が英雄として尊敬するホセ・リサールの人となりや当時の生活、歴史について学ぶことができました



配付食品を手渡すボランティア

小旅行と海水浴

週の真ん中には学生とスタッフだけでタガイタイへの半日旅行を行いました。中華レストランでの昼食後ピクニック・グローブ公園に行き、タール湖&火山島の眺望やジップラインを楽しみました。次の土曜日にはホストファミリーや校長先生にも参加してもらい総勢60名でバタンガスの海水浴に出かけました。ホスト達とのBBQや小型ボートで半島に渡っての海水浴やシュノーケリングなどきれいなフィリピンの海を存分に楽しみました。



海水浴を楽しむボランティア

感想

学生の皆さんはタイトなスケジュールにも拘わらず仲間と協力して小学校での授業をやり遂げました。またフェアウェルパーティーでのダンス披露については短時間の練習にも拘わらず素晴らしいパフォーマンスを發揮して子供やホストたちから絶賛されました。苦労が報われた瞬間だったと思います。これは彼らの努力に加えRASAと現地との信頼関係によるものであることも忘れてはなりません。ここでの体験は若い皆さんの一生の宝物となり将来どこかで生かされるものと信じています。

フィリピンと日本は同じアジアの島国でほぼ同じような国土と人口を有する国同士ですが、歴史的な背景や政治・経済、文化、宗教、習慣、人々の考え方などは大きく異なります。そして何よりも少子高齢化の日本に対してフィリピンは人口の40%が18歳未満の子供で平均年齢も25歳以下と若いというのが一

番の違いです。これはフィリピンの発展ポテンシャルがあることを意味し、子供たちをしっかりと教育していけば大きな国力になることは間違いありません。こうした国を訪問して、みんなが明るく家族や地域で助け合って生きる人々とふれあい、日本との違いを肌で感じることは、若い人たちだけではなく多くの世代の人々にさまざまなことを考えさせてくれます。家族はどうあるべきか？地域社会とのつながりは良いのか？日本は経済発展し暮らしは便利にはなったが人々は幸せになったのか？人の幸せとは何か？日本の将来を考えるうえで今のフィリピンの人たちの生き方から学ぶことができます。Study Tourを含むRASAの活動に若い人達だけでなくシニア世代を入れた多くの人が参加し、これまでRASAが築き上げてきたフィリピンの地方とのパートナーシップの火を絶やすことなくさらに質の高い活動にしていくことが今RASAに求められていることであると考えます。



Study Tour2025で 考えたこと

理事 後藤 学

すべてのツアー関係者に感謝しつつ、その中で私が考えたことをいくつか簡潔に述べたいと思います。

1.なぜ「アイドル」だったのか？

子どもたちの異様な熱狂の理由は、お姉さんたちが美しかったからです。でもそれ以上に、日本の楽しいアニメや洗練された車、電化製品、おいしい日本食等々を通じて、彼らの目に、日本は豊かですばらしい憧れの国と映っていたからでしょう。アジアで日本は、我々の想像以上に仰ぎ見られる存在なのだと思います。

2.どうして人々は互いに親密なのか？

学生たちが強く感じたのが、フィリピンの人々の家族や近隣などとの親密な人間関係でした。私たちはそれを、日本と違ってすばらしい、学ぶべきこと、と考えがちです。そのとおりですが、かつての日本にも同じ人間関係はありました。先進国はどこも近代化による豊かさや個の自立と引き換えに、それを失ってきたと思います。ただ、先進国でも、豊かな社会にふさわしい親密な人間関係構築の試みが、実は盛んに行われてきています。

3.子どもたちの熱量のすごさ、どこから？

このことについて、学生たちから、発展途上国の子どもたちの学習意欲の強さや積極性、また、学校の自由な空気が背景では、との意見がありました。確かに日本では、学ぶ楽しさより成績、自由より規律や同調圧力。最近まで学校現場にいた学生の指摘は、的確と思います。

4.貧しいのにテレビ、スマホ、に違和感

貧しさと贅沢が同居の不思議を、皆が感じたようでした。これは、ほかの発展途上国でも同じです。しかし振り返れば、日本がまだ貧しかった時代も、似たようなものでした。年収に近いほど高価なテレビを無理して買い、車が普及し始めると、若者はローンまでして車に乗ったものでした。人は、最先端の流行にあこがれるものなのでしょう。企業はそこに付け込んで欲望を刺激し、人々は、生産の場(低賃金)と消費の場(高物価)の両方で搾取される。それがこの社会、世界の構造と思います。

5.日本人、本当に好かれてる？

ホストファミリーから、「日本人をよく思っていない人もいるから気を付けて」と言われた学生もいました。現地で接する人たちは誰もがフレンドリーで、私たちの訪問を歓迎してくれていたのに、です。日本は、かつての戦争でフィリピンの人々に残虐な仕打ちをしました。戦後も、現在に至るまで出稼ぎの人たちにそれほど温かいとはいえないがたい国だったと思います。RASAの長年にわたる活動の蓄積の上に、今回のような友好的なツアーが成り立っていることを痛感させられました。

参加ボランティアの声

3月に実施した参加者へのアンケートで様々な意見や感想が寄せられましたが、紙面の都合で5名の方の一部の意見を掲載し、最後に項目別アンケートの結果を総括します。

川喜田 希 (南山大学 人文学部 3年)



参加の目的はためらわず自分から英語を話せるようになること、そしてホームステイを通して現地でのリアルな生活を体験し、日本との違いや様々な文化を学ぶことでした。英語はだんだんと勇気を出して言うことが増え、自分から英語を話すことが少しはできるようになりました。そしてフィリピンの生活スタイルや食文化を体験し、教会で出会った高校生たちとお互いの文化について話し合う時間をもち良い時間を過ごすことができました。

小島 華怜 (南山大学 国際教養学部 3年)



フィリピンの人たちはとても温かく愛にあふれていました。家族愛が強く、手伝いなんていう概念はないし家事はみんなでやるのが当たり前。それぞれ役割分担がなされていて自分ができることをやっていました。そんな姿に感動し、日本に戻って彼らのように当たり前家事をする習慣をつけようと行動に移し始めました。彼らからお金以上に価値のある「愛」の大切さを教わりました。ここでの経験は自己成長につながるかけがえのないものでした。

松坂 海佑 (南山大学 人文学部 3年)



集会での先生の司会の仕方と生徒の態度の違いを感じました。日本では形式的で堅苦しい印象ですが、フィリピンの先生は明るくフェスのような盛り上がりを見せる司会でした。これは儀式・形式を重んじる日本と、楽しさ・明るさを大切にするフィリピンというように文化の違いが考えられます。また子供たちが勉強に対して積極的でパワフルでしたが、日本とは異なり教育を受けることが当たり前ではないからこそ熱意をもって学んでいるのだと考えました。

岡田 彩加 (南山大学 理工学部 2年)



今回の活動を通して、行動することの大切さを学びました。最初は言葉も文化も違う中で不安もあったのですが、実際に行ってみて

自分の想像とは違う温かさやリアルな課題に触れることができました。この経験からこれからの人生でも、迷ったときには一步踏み出して、いろんな価値観や環境に飛び込んでみたいと思うようになりました。また言葉や文化が違って、相手を思いやる気持ちや態度で繋がれるということを実感しました。

三河 真結 (南山大学 外国語学部 3年)



私が体験したカブヤオ市と日本の違いについて感じたのは、文化、習慣、人々、すべてです。例えば、シャワーはバスタブがない、桶とバケツのみ、食事はミリエンダという間食文化が存在すること、その村全体のコミュニティの深い繋がり、学校での生徒の熱量など。その理由について、私はそれには宗教が関係していると思います。キリスト教の隣人愛のような、周りの人を助ける精神が強く根付いていると感じたし、それが日本との違いだと思いました。

その他の意見・感想

- * 早朝集合に遅刻してもフィリピンの人たちは笑顔で受け入れていました。心が広すぎるくらいやさしい。
- * かわいい小学生たちと出会い、将来この子供たちがもっと幸せに生きられる世界をつくりたいと強く感じました。
- * 侵略の歴史があり、複雑な感情を抱えている人、日本人による虐殺を根に持っている人も多いと聞きました。

項目別アンケートの結果(概略)

ツアーの運営や現地での活動、ホームステイなど12項目について5段階評価で意見を聞きました。全体的には、「良かった」、「やや良かった」がほとんど。ホームステイなどは、回答者全員が最高の評価で、ほぼ満足できる結果だったと思います。ただ、リーダーやホストファミリーの決め方、食品受給者宅訪問、市場等の見学などで一部低評価があり、また、子どもたちとの交流やホセ・リサール記念館見学などには「どちらともいえない」の評価があったので、RASAとして原因を真摯に究明し、今後の企画に活かす必要があると認識しています。

2024年度食品配付の報告

フィリピンの支援先サウスビル1小学校では、4月15日～6月15日の間学年末の長期休暇に入ります。学校登校日数に基づいた支援ですと、この間は支援対象に入っていません。しかし、支援対象の児童の家庭は極めて低い収入か、継続性のない不安定な仕事にしか就けないので、登校期間同様の支援が必要です。しかも成長盛りの対象児童にとっては、食事は欠かせません。常に支援が必要な状態です。この理由から、RASAの対象期間は休校期間もプラスした12か月間としました。

食品の準備から配付のルールと管理

食品購入はRASAの現地支所、140袋詰めは支所の近所のボランティア、学校への運搬は支所と食品業者、配付は学校で月2回実施されていて、コーディネーターが食品の保管と配付、その記録を行います。当日受け取れない場合も、後日確実にお渡ししています。

配付日に、先生やコーディネーターは支援対象家族との面談で家庭の状況等の様子が聞け、配付継続が必要の有無を確認するそうです。

支援対象に選ばれる児童は、学年の先生とコーディネーターが、家族の諸状況や成育状態、登校日数などから選択します。1年を前期A、後期B

の2期に分け、140人ずつ延べ280人を選択して支援していますが、約50人は支援を断つわけにいかず、継続して支援を受けています。訪問配付時には、毎回多くの児童から、感謝の言葉と「次の半期も選んでください！」と、笑顔で支援継続の依頼を受けました。

支援の管理として、体位測定、登校日出欠状況、食品受領サインの記録などを、RASAに報告することが契約となっています。

現地支所の責任者は、送金額に対する支出(購入食品等、人件費(コーディネーター2名、ヘルパー2名)の報告に領収証を添えて送付してきます。これによって、RASAは支援が確実に行われているかを確認しています。また、現地に出張し、実際に購買先に行き価格調査も行っています。

実際に行って確認できない外国への支援は、後に記録保管できる書類の報告とそのチェック、さらに速やかに届くことも重要で、日本での細かいチェックが欠かせません。多くのご支援者からいただいた寄付金を送金しており、それが正しく有効に使われているかを管理して、報告するためです。

皆様のお陰でこのように大きな支援ができました。今後ともよろしく願いいたします。

2024年度 配付食品量

	米	卵	粉ミルク(33g)	缶詰	インスタント麺	パスタセット
1年間	15,400kg	19,460個	14,140袋	6,440缶	6,020袋	140
1世帯当たり	110kg	139個	101袋	46缶	43袋	1

後半B 支援対象世帯の状況

前半Aからの継続	49
新規	91

世帯月収(円換算)		世帯人数	
0	21	3人以下	8
1～5,000円	14	4～6人	74
5001～10,000円	38	7～9人	42
10,001～15,000円	51	10～12人	4
15,001～20,000円	15	13～15人	3
20,001円以上	1	不明	9

父親の職業		母親の職業	
無職	24	無職	99
死去	8	死去	6
行方不明	8	行方不明	4
建設作業員	40	メイド	8
運転手(トラインクル含)	11	販売員	6
ゴミ収集・清掃	9	従業員	6
販売員	6	ゴミ収集・清掃	5
工場作業員	5	その他	6
配達員	5		
その他	24		

「東海地域NGO活動助成金」受諾のご報告

1月に「2024年度 食品配付支援」の資金不足のため、「東海NGO活動助成金」の応募申請書類を提出しました。2月に1次審査を合格し、3月1日名古屋YMCA 名古屋NGOセンターにおいて最終審査が

あり、活動発表後の質疑応答で支援の必要性を審査員の皆様にお伝えしました。

審査で採択され、20万円の助成金を受諾できました。今後の活動に活かしてまいります。

「ボランティア応援金」をお渡ししました

昨年ふるさと納税制度を活用したガバメントクラウドファンディング(GCF) なごや『ふるさとNPOセレクト』に「ボランティア応援プロジェクト」で挑戦し、皆さまからの応援により補助金192,000円をいただきました。

この貴重な補助金をもとに、参加ボランティアの皆さまに応援金としてお渡しするプロジェクトを開始しました。

Study Tour 2025 事前研修会を1月18日(土)、2月8日(土)の2日間開催し、その際にボランティアの皆さまに「ボランティア応援金(12,800円/人)」をお渡しすることができ、参加費の自己負担軽減に繋がりました。異文化交流や現地でのボランティア活動を通じて、ボランティアの皆さまが得る学びや気づきは、将来に向けた大きな財産になると思います。

これもひとえに、支援者の皆さまのおかげです。厚く御礼申し上げます。引き続き、皆様の温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



今後の活動予定

- 6月中旬 定時総会開催予定
- 6月下旬 フェスタジュニア参加予定(豊田スタジアム)

会員が減少傾向です！活動を支援いただける方、法人・団体を募集しています！

資料をお送りいたしますので、RASA-Japan事務局までご連絡ください。

※「遺贈によるご寄付」、「相続財産のご寄付」は、相続税が免除されます。お志のある方はご連絡ください。

RASA-Japanは皆様の会費と寄付金で運営されています



認定 特定非営利活動法人
RASA-Japan
理事長 藤井 忠子

〒468-0014 愛知県名古屋市天白区中平2-2627
TEL/FAX 052-803-1649
E-mail info@rasa-japan.com

郵便振替：口座番号 00890-4-31185
受取人 特定非営利活動法人RASA-Japan
三菱UFJ銀行：平針支店 普通 0037025
トクテイヒエイリカソドウホウジンラサジャパン

クレジット決済はこちら



ホームページ
<http://rasa-japan.com>



@rasa_japan

@rasa.japan

@rasa_japan

